瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 15
瑪瑙集 …… 27
紅玉集 …… 30
１０月号月評 …… 32
恵贈句集拝見（79） …… 34
恵贈俳誌拝見（45） …… 36
特別作品「マンデラ氏の虹の国を訪ふ」 38
琥珀集作品鑑賞 …… 40
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 41
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ …… 42
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 43
他誌転載 …… 46
イザナミの言語学（10） …… 48
郡山金魚資料館吟行 …… 50
俳誌交歓 …… 52
琵琶湖俳句サロン …… 53
エッセイ「茜色のそら」 …… 54

2014/10　第103号

今月の一句

行秋の詩を滲ませし羽根のペン　桂　樟蹊

（昭和六十一年作）

イギリスの北部の湖のほとりにワーズワースの家がある。その二階の詩人の部屋には机上に詩を書いた紙や、羽根ペン、インキ壺があり、紙滲みした詩の紙を見て感動された師は「詩を滲ませて書いた羽根のペン」と句帳に書かれたと云う。身に沁みる思いであったとの後日談が甦る。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

松瀬青々を訪ねて

塩路隆子

屋根灼くる青々旧居通り抜け

白狐涼し屋敷の稲荷神

燭のなき幽さ猛暑の地蔵尊

苦瓜咲く長屋なごりの海老江町

筆勢よき短冊に汗落すまじ

青々の句碑なぞるとき夏の鵯

ひたすらな蝉の声湧く終焉地

PDF= 俳誌の salon

十月号光耀抄

塩路　隆子選

心中を語る太夫や盆歌舞伎　石川かおり
藍染の土間の工房蚊遣香　宮田　香
星まつり拙き文字の大志かな　松岡　和子
甦る大船鉾や檜の香　山口キミコ
松陰の獄屋跡なり夕立風　片岡久美子
厳かに勤行の声蓮の花　渡部　法子
光秀の果たせぬ夢や桔梗咲き　坂根　宏子
朝顔に連ぬる想ひ加賀千代女　大松　一枝
満州のはなし昭和の夕端居　西郷　慶子
ガラシャ碑の奥に径なし揚羽蝶　鈴木　照子
荒々しき海蝕洞や秋かもめ　坂上　香菜
時折は爺も重宝天花粉　阪本　哲弘
打水の後気まぐれな通り雨　国包　澄子
瀬の音を間近に宿の鮎料理　北尾　章郎
夜明け前生れたる蝉のうすみどり　辻　香秀
蚊も住まぬ高階にぬてアロマ焚く　森下　康子
原人のさまに並びて夕端居　塩路　五郎
養老の滝より風の湧き立てる　竹内　悦子
夕焼けて鉄路は金の道となる　中井　弘一

PDF= 俳誌の salon

ねぶた山車見栄切る武者の気迫かな　中井登喜子
鬼百合のしたたか惜しむ別れなり　中川すみ子
丹田に力を込むる炎天下　中村ふく子
金魚田の隅に群がる小赤かな　中本　吉信
真田紐懸かる桐箱切子鉢　橋本　靖子
復活の夏の篝や十石舟　秦　和子
夏帽を渚に映しエーゲ海　松田　和子
遠会釈交はすご隠居甚平着て　宮崎左智子
すり足の夏足袋映ゆる能舞台　飯田美千子
地下街のきらめきの中水中花　伊東　和子
境内の神の田小さし田水湧く　伊藤　純子
泰然と昭和一桁夕端居　大島みよし
古書市の店主高齢秋暑し　笠井　清佑
フル回転の前頭葉や大暑なる　川崎　利子
田舎家のモダンな造り円座敷く　木戸　宏子
身の内の範箍れたる猛暑かな　小西　和子
町の怪を語る長老地蔵盆　黒住　康晴
涼やかな色目の着物風を呼ぶ　小林　久子
大船鉾平成の世に漕ぎ出づる　桂　敦子
思ひ出の数の分だけ夏疲れ　土井久美子

PDF= 俳誌の salon

避暑地へと列車乗り継ぎ鄙の駅　増田　一代
手に馴染む母の手擦れの渋団扇　粟倉　昌子
さみどりの雫一滴釣しのぶ　田中　淺子
落人の里色変へぬ濃あぢさゐ　井口　淳子
空白の日記埋めむ夜の秋　小澤　莱美
歳月の亡夫の忌近し朝曇り　杉本　綾
刈草の匂ふ田道や夕鴉　山本　孝夫
矍鑠の翁を一撃日射病　和田　郁子
暮色濃き川瀬震はす河鹿笛　笹井　康夫
涼風の快きかな詣で道　佐々木和子
花火終へ心鎮もるまで歩く　佐用　圭子
孟蘭盆会塩入飴を頂戴す　鷲見たえ子
盃交はす爺の放談鱧料理　高谷　栄一
蓴菜を摘む桶舟の夕日影　高屋喜美子
羽化ならず箒の先の蝉骸　竹内喜代子
くちなはの棲み易きやう土くだく　谷口　俊郎
花氷ジャズ音低き純喫茶　辻　知代子
結納の請書代筆夏座敷　津田　富司
産院へふたり迎へに花野道　常田　創
安らかな産前休暇なり残暑　常田　希望

PDF= 俳誌の salon

漱石の初版全集曝しけり　十時　和子
職員の浴衣姿や美術館　難波　篤直
鉄橋を渡れば涼し我が故郷　西田　史郎
歳月や籐寝の莫蓙の飴色に　西村　敏子
けふも又予定キャンセルこの暑さ　能勢　栄子
袴涼し能面展の九郎右衛門　人見　洋子
石上に涼しげに鳴く神の矮鶏　平井　紀夫
気忙しく寺苑をはしる蟻の群　福本すみ子
黄金の千手観音燭涼し　藤本　秀機
見舞ふ途の蒲生の野辺や初稲穂　松田　洋子
案内書に日中韓語日雀鳴く　三川美代子
ソーランの揃ひ拍子や腰団扇　森田　利和
祇園会や役行者の法螺ひびき　山崎　里美
特急の止まらぬ駅や夏燕　吉田　宏之
初ゆかた指にくひ込む紅鼻緒　伊藤　和子
医者通ひせっせせっせと蝉囃す　伊藤　憲子
尾の長き鳥来て鳴くや百日紅　稲田　和子
朝涼や目覚めさらりとパジャマ脱ぐ　伊庭　玲子
夏書せる紺紙金泥経光る　字佐美慈子
湯上りの首にタオルと手にビール　大堀　賢二

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

金魚　宮田　香

金魚田の水面を揺らすあめんぼう
出目金のふるさとはここ出荷待つ
琉金の薄き尾鰭や水に透き
藍染の土間の工房蚊遣香
夏祭ブリキ金魚に小舟の帆
夕凪と波とひとつになる小舟
ペンギンの跳び込み夏の空乱す

夏盛ん　石川かおり

蝉時雨だらだら坂にある校舎
蒲の穂や旧き名残る職人町
人影に金魚田の群逃げまどふ
路地裏や雨の匂ひの花カンナ
大の字のふたりの寝息蚊遣香
心中を語る太夫や盆歌舞伎
応援の寄せ書の旗夏盛ん

鮎捌く　松岡　和子

本名かあだ名か知らず心太
星まつり拙き文字の大志かな
本日の釣果五匹の鮎捌く
秋立つ日書と生け花のコラボ展
雨つれて来よと遠雷呼びにけり
深緋（こきび）てふ日本の赤や初トマト
猪垣の波に囲まれ峡田かな

PDF= 俳誌の salon

祇園会　山口キミコ

祇園会の粽購ふ十五日
山鉾の見学園児列をなし
天を突く長刀鉾のくじ取らず
天平の舞厳かに前祭
山鉾に先立つ脚立カメラ群
山車回し四囲の懸装の披露目かな
甦る大船鉾や檜の香

古地図　片岡久美子

風抜くる松下村塾青芒
松陰の獄屋跡なり夕立風
梁高く涼気身をさす御船倉
炎天下まぼろしの志士駆くる影
どの道を行くも築地や夏みかん
外濠の石橋涼し古地図手に
万緑を確と抱きて萩城址

法金剛院　渡部　法子

蓮咲きて朝の参拝賑はへる
厳かに勤行の声蓮の花
蓮池にあふるる生気浄土かな
秋暑し小さき滝の干上がりぬ
玻璃越しに菩薩の微笑法師蝉
湯気中に明智の供養秋立てり（妙心寺）
新涼の鏡天井睨み龍

桔梗　坂根　宏子

黒揚羽山門にある桔梗紋（ききょうの里・谷性寺三句）
光秀の果たせぬ夢や桔梗咲き
里山や八重咲き桔梗探し当て
叡山へ九十九折なる木下闇
山中をほしいままなり時鳥
修業堂花菩提樹の香が覆ふ
叡山に牧水の歌碑風青し

PDF= 俳誌の salon

遠花火

大夕立過ぎて清気を残しけり
玉葱のほろほろ沁むる夕厨
朝顔に連ぬる想ひ加賀千代女
墨の香や写経三昧夕焼くる
容赦なく鴉のさわぎ夏の暁
目覚むれば雨音静か花南天
遠花火異国の戦禍哀しかり

大松　一枝

夕端居

満州のはなし昭和の夕端居
宵風鈴今日の気弱をなぐさめぬ
盆の籔入り天界の客交じりけり
女丈夫も小さき芋虫恐れけり
饒舌のとぎれ取り出す秋扇
風鈴の今朝はバッハのチェロにのり
取つ組み合ひありし広場にカンナ咲く

西郷　慶子

火蛾の群

火蛾の群日本海守る岬基地（経ヶ岬）
鳴き砂の浜白々と夏の暁
傾き咲く合歓の崖あり女城（めじろ）あと
辿り来てガラシャゆかりの夏桔梗
ガラシャ碑の奥に径なし揚羽蝶
清流のガラシャの里や青田風
玄武洞へ杖を突く先瑠璃蜥蜴

鈴木　照子

礼文島

山裾が島の裾なり秋の航
秋晴の花の浮島日本海
手の届くところに咲ける利尻ぶし（島兜）
北限の島みち千島吾木香（白き穂のわれもこう）
荒々しき海蝕崖や秋かもめ
草叢より蝦夷蝉鳴けり秋暑き
北の島の海鮮料理氷頭膾（鮭の鼻の軟骨）

坂上　香菜

PDF= 俳誌の salon

蝉時雨　阪本　哲弘

鉄骨を渡すアームや雲の峰
囮鮎焼く仕儀となり酒苦し
六代目のグリコ走者や夏の月
時折は爺も重宝天瓜粉
灼くる地にさらばと高度上げ翼機
空襲の雨を呼びたる跣かな
電文は「ハハシスチチ」や蝉時雨（昭和二十年八月）

紅木槿　国包　澄子

打水の後気まぐれな通り雨
下町の低き軒端や紅木槿
蚊遣香ばらの香りの煙吐き
青々を熱く語れる夏の句座（松瀬青々）
夏期講座子等の眼の一途なる
向日葵のハガキ絵送り夏見舞
手花火や囲みたる子を煙らする

鮎料理　北尾　章郎

天と地の色を二分や麦の秋
大学に生れたるトロ酢のねた
夏場所や大勝負背に警備員
瀬の音を間近に宿の鮎料理
飲み会のこたび口実巴里祭
夏帽の顎紐強く川下り
露天湯の夜目に山梔子匂ひけり

大花火　辻　香秀

夕暮れや火照りたる身に冷酒浸む
護摩木焚く炎を浴びて暑気払
空といふキャンバスに描く大花火
花火散る星のひとつは夫らしき
夜明け前生れたる蝉のうすみどり
片蔭に乙女のトリオ恋談義
夕風に待つや肴の鱧おとし

PDF= 俳誌の salon

アロマ焚く　森下　康子

一年分を亡夫へ報告盆の夜
大型の牛歩台風神仏
口遊ぶいつもの曲や胡瓜切る
七不思議のひとつや私ビール呑む
蚊も住まぬ高階にゐてアロマ焚く
公衆電話探す半刻汗しとど
パチンコが趣味てふ女優汗冷ゆる

軒　簾　塩路　五郎

路地奥に昭和の暮し軒簾
追ひ討ちの音やごきぶり取り逃し
産寧坂舞妓芸妓の日傘往く
文豪の初版本あり曝しける
原人のさまに並びて夕端居
逆らうて流れて風のとんぼ
めまとひのどこからとなく付いて来る

パイナップル　竹内　悦子

凛と咲く蓮叢がりぬ浄土とも（草津烏丸半島二句）
みづうみに紅蓮揺るる風起こり
パイナップルを切る大胆へ児の視線
養老の滝より風の湧き立てる
養老の滝滔々の飛沫浴ぶ
夏野菜のカレー好評婿の作
「いないいないばあ」を聞かせて児と昼寝

夏　空　中井　弘一

ひと夏の命を焦がすねぶたの夜
サイクリング夏の真中を走り抜く
盛り訪ふ向日葵に陽は満ちてをり
昇る日に今日を生きむと蝉鳴きぬ
夏祭り孫の誕生待ち遠し
夕焼けて鉄路は金の道となる
朝顔の絵葉書届く朝涼し

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

法師蝉

黒住　康晴

かぶりつく西瓜に顔を埋めけり
蜩に赤子の手足応へける
法師蝉礫となりて頬を打つ
操りの人形笑ふ地蔵盆
町の怪を語る長老地蔵盆

かき氷

小林　久子

涼意ある色目の着物風を呼ぶ
メニューには「北山しぐれ」かき氷
夏山はいまカラフルや山ガール
やんはりとこなし生くるや秋桜
箱の桃赤子包むがごとくなり

風涼し

桂　敦子

名画なる湖畔のをんな風涼し
山形の誇るブランドさくらんぼ
七夕や猫駅長の人気駅
雨降りて逢瀬叶はぬ星今宵
大船鉾平成の世に漕ぎ出づる

夏の灯

土井久美子

人工の島は風さへ暑く吹く
近未来夏休みの児と体験す
軽やかにロボット踊る大暑かな
思ひ出の数の分だけ夏疲れ
トレンデイードラマのやうな夏の灯よ（六本木森タワー）

避暑地の思ひ出

増田　一代

避暑地へと列車乗り継ぎ鄙の駅
朝涼し高原の風パンの店
沙羅咲きて思ひ出辿る軽井沢
商店街に匂ふ蚊遺や夜明け前
大花火琵琶湖を染むるひと夜かな

PDF= 俳誌の salon

十月号月評

塩路　隆子

心中を語る太夫や盆歌舞伎　　石川かおり

作者は句会で唯一席題を出しその場で即吟をする「楽しく作る俳句教室」に属しておられる。掲句はその時に作られた句である。お盆ならではの心中ものを繰り広げる太夫の熱は、益々の昂ぶりである。恐らく汗を拭き拭きの熱演であろう。そのさまを余分なことを省きながら、大きく連想の広がる句に仕立てあげられた。立派なものである。

藍染の土間の工房蚊遣香　　宮田　香

郡山へ吟行された時の句である。柳沢氏十五万の城下町でありそのなごりが残る街で、その一つに紺屋資料館がある。土間の三和土より藍染の仄かな香りとともに流れる蚊取線香の匂いなど、昔のままの工房で技を伝える紺屋に作者は惹かれたのであろう。良い句に仕上がっている。

星まつり拙き文字の大志かな　　松岡　和子

度々登場の甲賀の里の作者である。七夕の願いを書いた鄙の少年少女の大志とは何だったのかこっそりと覗いてみたい気がする。「拙き文字」だけで短冊を書いている年代が解り、前途洋々の「大志」を持つ眼を輝かせた子供たちが想像できる。省略の効いた句に惹かれた。

甦る大船鉾や檜の香　　山口キミコ

今年の祇園祭は前祭と、一五〇年振りに復活をした大船鉾を中心とした後祭と、二度の楽しみに沸いた古都ならではの優雅なお祭りであった。その堂々とした巡行はテレビの画面でしか観ていないが、主催をされた大船町の人達のご苦労は大変であっただろうと感激をした。この句の下五「檜の香」の置き方が抜群。天元の一石の役目を存分に果たしている。特に日本の祭に興味を持ち作句されている作者ならではの句である。

松陰の獄屋跡なり夕立風　　片岡久美子

吉田松陰は幕末の長州藩士である。ペリーの再度の来日の時に密航を企て、投獄されたのが野山屋敷であった。出獄後松下村塾を受け継ぎ、尊王攘夷の指導者を養成したが安政の大獄で刑死した。その獄を訪れた時の作品である。折から吹く夕立前の風に作者は心を奪われたのは、まるで松陰の今後を予測しているように感じられた

PDF= 俳誌の salon

に違いない。刑死であれば「野分風」位を入れても良かったのではと思いつつ選評を書いている。歴史認識を新たにさせられた作品である。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon